



明化の教育

12月号 (第451号)
平成29年12月1日
文京区立明化小学校
校長 溝畑 直樹

自分自身をより深く理解する学習

校長 溝畑 直樹



放課後練習を終え、家路をたどる時刻には外はすでにまっ暗。器楽部の子供たちをたくさんの保護者、教員が見守りながら下校させている様子は、明化小に冬の訪れを告げる光景でもあります。早いもので今学期も残り、3週間あまりとなりました。

さて、11月24・25日の二日間にわたって行った音楽会には、多くの皆さまのご鑑賞をいただきありがとうございました。子供たち渾身の演奏はいかがでしたでしょうか。偉大な作曲家であるバッハは『音楽だけが世界語であり、翻訳される必要がない。そこにおいては魂が魂に話しかける。』と語りました。音楽は本当に不思議です。音楽を構成しているものは『リズム』『メロディ』『ハーモニー』の3要素でしかありません。しかし、その無限ともいえる組み合わせが、数々の音楽となり、私たちの心を揺さぶり、感動を呼び起こします。時として音楽は、『耳から脳を経て音として認識される』という通常のプロセスを軽々と飛び越え、直接心に入ってくることがあります。悲しくないのに、涙が溢れてくるような、不思議な感覚。それは、バッハに言わせれば、『魂が魂に話しかけてきた』ということになるのでしょうか。

明化小が大切にしている音楽という活動。子供たち、教職員、保護者、明化小に関わる多くの皆さまと音楽の喜びを共有できるひと時をもてたこと、それは何より嬉しいことでした。

ご案内のとおり、明化小は今年度から2年間にわたり、東京都教育委員会の『人権尊重教育推進校』指定を受け、研究を進めています。その中で東洋大学准教授の須田将司先生から、「人権教育は自分自身をより深く理解していく学習である」とのご指導をいただきました。「人権」を考える時、どうしても他者の在り様に目が向きがちですが、人権というフィルターを通して見ているもの、学んでいるものは、自分自身の生き方であり、ものの考え方ののだと、改めてその価値に気付かされたところです。

先日、2年生は「おじいさん、おばあさんとなかよし」と題した学習を行いました。学習の終盤では、子供たちが高齢者と触れ合ったこの活動を振り返り、自分の考えをカルタに表しました。



- あるいてる てすりをつかみ あきらめない
- はげますよ ゆうきをだして あるいてね
- つえついで たいへんなのに あく手まで
- みなさんが 元気でいれば しあわせだ

いずれのカルタも、高齢者との関わりを通して自分の気持ちときちんと向き合っている子供たちの姿が浮かんできます。こんな子供たちの姿を支えに、今後も人権教育についての研究を進めて参ります。

早いもので、東日本大震災から7度目の冬が被災地に訪れようとしています。今年も、福岡をはじめとして各地で起こった豪雨・台風被害、サンマの記録的な不漁なども話題になりました。改めて、自然と私たちの生活とは、緊密な関係にあることを思い知らされた一年でもありました。

被災された皆さまに心からお見舞いを申し上げますとともに、平成30年は、被災地の町にも幸せがたくさんある一年でありますようにと心から祈ります。